

ベルトルト・ブレヒト 『アンティゴネ』：翻訳と注釈 (2)

北 野 雅 弘

A Japanese Translation of Bertolt Brecht's *Antigone* (Part 2)

Masahiro KITANO

承前 (720行～)

長老たち

山をなす雲のように、今や我が前に
その時が来た。すなわち、オイディプスの子が部屋で
遠くからバックスを聞き、最後の道行の支度をする時が。
いま、バックスはその眷属を呼びよせ、苦しみやつれつつも
いつも喜びを渴望する我が国は、喜びの声を返す。
憂う国にあの方が近づき、忘却の酒を差し出すときには、
勝利は巨大でバックスは抗い難いからだ。
国は、息子らのために縫いし喪服を投げ捨てて、
疲れ果てんと、バックスの狂宴へと急ぐのだ。(720-729)
(長老たちはバックスの杖を手取る)¹
肉欲の精霊、それでも争いではいつも勝利するお方！
抗えぬほどの力で誘い^{いざな}
身内同士ですら重ねて投げ捨てる方。
決して滅びず、あの方を得る者は正気を失う²。

-
- 1 ハイモンの退場後始まる第三スタシモンは本来「エロス讃歌」であるが、ブレヒトは「バックス讃歌」に変更している。ただし、詩行の多くはヘルダーリン版のエロス讃歌からとられ、ブレヒトの独自の詩行と混ぜ合わされている。
 - 2 スタシモン冒頭のエロスへの呼びかけ「戦いでは敵なしのエロス様」(S781)は、ヘルダーリンで「愛の精霊 (Geist der Liebe)、それでも争いではいつも勝利する方！」と、他の箇所と同様 (Flashar (1988 : 403)) 神名の固有名詞を削除するが、ブレヒトはそれを「肉欲の精霊 (Geist der Lüste im Fleisch)」とし、エロスではなくバックスへの呼びかけに変更する。「意のままに誘い、身内同士ですら重ねて投げ捨てる (B730-731)」は、「男たちの骨肉相食む争いを駆り立てもした (S793-794, H259)」を变形。マリナーは incestuous lovers と解する。ソフォクレスのスタシモンの最後は「それ (欲望)こそが、大いなる掟の／傍らに座し、世を統べるもの。／抗いがたき女神アフロディテ様が／お戯れなのだから」だが、ヘルダーリンが「そも初めから、大いなる和合の生成に加わる。そこでは神々しき美しさが、争う事なくともに戯れているのだから」と訳し、ブレヒトはヘルダーリンの訳を利用するが、「両の手の暴力で地上の国を荒らしはせず、／そも初めから平和のうちに」と、バックスと平和との結びつきを強める。これはソフォクレスの「抗いがたき (ἀμαχος)」をヘルダーリンが「争うことなく (unkriegerisch)」と解したのを拡張したのだろう。

心奪われ荒れ狂う。
 軛の下でも蠢いて新たな首を差し出す。
 塩掘る坑^{あな}で息することにも、
 黒き海行く板薄き船にも怯えない。
 あの方は、異なる肌を混ぜ合わせ、
 全てをかき混ぜる。だが
 両の手の暴力で地上の国を荒らしはせず、
 そも初めから平和のうちに、大いなる和合に加わるのだ。
 そこでは神々しき美しさが
 争うことなく共に戯れているのだから。(730-743)

(アンティゴネ登場、衛兵に曳かれ、侍女たちを従えている。)

一人の長老

されど今、私は拍子を外し³、
 もはや溢れ出る涙を
 抑えることは叶わない。
 まさに今、アンティゴネが
 死の供物たる黍^{きび}と酒を
 受け取らねばならぬがゆえ。(744-748)

アンティゴネ

父祖の国⁴の市民たち、見なさい。
 最後の道を私が歩むのを。
 最後の陽射しを仰ぎ見るのを。
 これが見納め？
 いつかは誰をも眠りにつかせる死の神⁵が
 生きたまま私を
 アケロンの岸辺に導くのです。
 そして私は、婚礼の式も
 花嫁の祝ぎ歌もなく
 アケロンの花嫁になるのです。(749-759)

長老たち

とは言えあなたは世に知られ誉れを受け、

3 ソフォクレスでは「掟の外へと運ばれる」だったが、ここでブレヒトは踊っていたコロスがその「拍子を外す」ことへと変えている。

4 ソフォクレス「父祖の地の (γᾶς πατρίδας)」に対するヘルダーリンの des Vaterlandes をブレヒトは der Vaterstadt に変更。

5 ソフォクレスの「誰をも眠りにつかせるハデス (ὁ παγκοίτας Ἅιδας) (810)) をヘルダーリンは「誰をも沈黙させる死の神 (Der alles schweigende Todesgott)」と訳したがブレヒトはオリジナルの意味に戻している。

地下にある死者の部屋へと赴く。

病いに拐われたのでも

鋼はがねの報いに鋼を受けたのでもなく

ただ自分の生き方を貫いて

生きたまま地下へ、死者の世界へと赴くのだ⁶。(760-766)

アンティゴネ

何てこと、この者たちは嘲笑っている！

まだ死んでおらず、

日を浴びている私を。

国よ、そしてわが国の

お前たち大金持ちよ！

それでもいつかは私に証言せねばならない。

どうして私が、愛する者たちの嘆きもなく、

どんな法によって、掘り下げられた墓穴へ

稀有なる墓へと向かわねばならないのかを。

死すべき人のうちにも、

亡くなった影のうちにも、

生にも死にも居場所はなく。(767-778)

長老たち

糾されたときには、権力は

譲りはせぬもの。それが滅ぼしたのは

怒りとともに生まれた自己認識⁷。(779-781)

アンティゴネ

お父様、不運なお母様、

6 アンティゴネのコンモス (S806-882) に対応する箇所冒頭二連 (B749-766) は、ほぼヘルダーリン訳を用いている (S806-822, H260-261)。但し、「剣の報いを受けるのでもなく (Nicht für das Schwert empfängst du Handlohn)」(S820) は、「鋼の報いに鋼を (des Eisens Handlohn, das Eisen)」(B762-3) と「鋼」を強調する。残りの部分は、運命きだめについて語るコロスをアンティゴネが責め (B834)、テバイの破滅を祈る個所の前までは、コンモスと第四スタシモン (S944-987) のヘルダーリン訳を利用している。

7 ソフォクレスの「あなたを滅ぼしたのは、自らを恃むそのご気性 (あるいは怒り) (αὐτόγνωτος ὀργή)」(S874) をヘルダーリンは「怒りに満ちた自己認識 (Dich hat verderbt/ Das zornige selbsterkennen) と訳すが、ここでは αὐτόγνωτος は「自己を知る」という、合成語の部分それぞれの本来の語義で捉えられている。この言葉は古典ギリシア語でソフォクレスのこの箇所およびそれへの注釈以外に用例はなく、語義は定かではないが「自分で決めてしまう (αὐθαίρετος)」と同義であるとスコリアにある。また、ὀργή は「怒り」だけでなく「気性」や「性向」一般をも意味する。ブレヒトはヘルダーリンの dich を die に変え、直前の Macht (権力) を指示させたと Flashar (1988: 404) は指摘する。ただし、その場合には、die を「滅ぼす」の主語とみなすべきだろう。また、T, I, C は die がアンティゴネを指すと捉え、コロスがアンティゴネに対して三人称的に「彼女を滅ぼしたのは、その怒りとともに生まれた自己認識」と解する。C “In the angry knowing herself She has destroyed herself”, T 「烈しい性が、この女を破滅させたのだ。」

心暗き私はお二人から生まれ、
夫なきまま暮らすようにとの呪いを受け、
お二人のもとへ参ります。
ああ、ああ、兄様。
生を楽しもうとして、死んでしまった。
かろうじてこちらにいた私まで
兄様は地下に引きずり込む。(782-789)

一人の長老

(^{きび}黍を入れた皿をアンティゴネの前に置いて⁸)
だがダナエの身も、
空の光を奪われて、
鉄の格子を耐えたのだ。あの方は闇に横たわっていた。
だがあの方は偉大なる血筋の生まれであった、娘御。
そして時の創造主のために
^{こんじき}金色の時の刻みを数えていた⁹。(790-795)

アンティゴネ

フリュギアから来た
タンタロスの娘は、
シピュロスの頂^{いた}で
痛ましい最期を遂げたと聞いた。
隆起した瘤となり¹⁰、

8 ここで長老たちはアンティゴネへの処刑準備に儀式的に加担している。

9 ダナエのエピソードはソフォクレスでは第四スタシモンで歌われる (S944-950)。ソフォクレスは、ダナエが閉じ込められた地下室にゼウスが「黄金の雨」に変身して訪れ関係を持った話を伝えているが、ヘルダーリンは「ゼウス」を「時の父 (dem Vater der Zeit)」に、「黄金の流れ (*χρυσόρροτος*) たる胤を宿す」を「黄金の時の刻み (Die Stundenschläge, die goldnen) を数える」に意図的に変更して訳した。ヘルダーリン (1967: 59) は「アンティゴネ注釈」で、この変更について、「なぜならこの神の性格は、その永遠の傾向として、「この世」から「あの世」への志向を、「あの世」から「この世」への志向に向き換えさせることにあるからである」と述べ、「時の刻みを数える」についての独自の考察をおこなっている。ブレヒトはヘルダーリン訳をほぼそのまま用いるが、「時の父」を「時の創造主」に、「高貴な血筋」を「偉大なる血筋」に変更している。

10 ゼウスの子タンタロスの娘ニオベのエピソードに関してブレヒトは、ヘルダーリンが冒頭に置いた「荒地に似たものになり (der Wüste gleich sei worden)」(H260) を省略した以外は、語順変更しただけでほぼヘルダーリン訳を用いる。この話を『アンティゴネ』における最高の箇所」と捉えるヘルダーリンは、深く苦しむ魂が、高い意識のなかで、「意識をもたぬ物たち、しかし運命の支配のもとに意識の形式を取るに至るような物たち」に似てくるとみなし、その一例として、「元来非常にゆたかな豊饒性をもっていたために日射の作用をあまりにも鋭く受けて、それゆえ早魃状態 (*dürre*) におちいり、不毛の野と化した土地 (ein wüst gewordenes Land)」を挙げる。干からびて不毛の地となるニオベの比喩がここで用いられるのは、アンティゴネもまた、「通常を越えた英雄的なありかたや激情のなかにあるときに非有機的な状態に近づ」(H291, ヘルダーリン (1969: 58)) いていると彼が考えたからだろう。他方、ソフォクレスの「絡みつくツタのように、岩が身体を覆い尽くした (*τὴν κισσοῦς ὡς ἀπενήϊς/ πετραία βλάστα δάμασεν,*)」(S825-826) は、地面から岩が伸びてニオベの身体を囲うイメージに、岩室に閉じ込められる自分への処罰を重ね合わせている。

ツタを身に纏うかのように
 ゆっくりと岩を引き寄せ縮んでいった。
 人の話では、冬がその傍らに留まり
 まなじりから流れる雪の輝きの涙で
 そのうなじを洗っていると¹¹。
 その娘さながらに、精霊が私を眠りにつける。(796-806)

一人の長老

(ワインを入れた壺を彼女の前に置いて)
 だがあちらは神聖とされる、聖なる一族の方、
 我らは人から生まれしこの世のもの。
 確かにあなたは死んでゆく。だがご立派ではある。
 神への生贄に似ていなくもない。(807-810)

アンティゴネ

お前たちははもう、ため息をつき私を見捨てている¹²。
 上を見上げて青空を眺め、私を目に入れない。それでも
 私は、神聖なることを敬虔に行なったに過ぎない。(811-814)

長老たち

ドリュアスの子も、不正なる嘲罵を喚き立てているさなか、
 素早くディオニュソス様に捕らえられ、険しき岩の牢獄に閉じ込められた。
 嘲る舌で狂気のうちに探っていた、その相手が
 神だと学んだのだ¹³。(815-819)

アンティゴネ

お前たちが不正なる嘲罵をかき集め、
 そこから私の涙などは拭き取って、役に立ててくれていたならずと良かった。
 でもお前たちは遠くを見ることはない。(820-823)

長老たち

だが二つの海がぶつかる、白い岩壁の傍ら、
 ポスフォロスの岸辺、
 そこで、町の近くで、戦さの精霊が眺めていたのは、
 フィネウスの二人の子が、あまりに遠くが見えたせいで、
 その驚の目を槍で貫かれ、
 勇敢な瞳が暗くなるさま。

11 T, Iは過去形にしているがこれは物語現時点のシピュロスの情景の比喩的な記述だろう。

12 ここからのアンティゴネの言葉はブレヒト独自のテキストである。

13 ドリュアスの子リュクルゴスと、フィネウスの子らのエピソード (B815-819, 824-830) は第四スタシモン (S955-960, 968-976, H266-268) から若干の省略を行いこちらへ移された。アポドロスによると、リュクルゴスはディオニュソスの信徒を迫害したためディオニュソスから狂気を与えられ、息子をツタの幹と思ひ込みその鼻と耳、指を切り落とした。ただしソフォクレスでは「狂気に導かれ、嘲る舌で刃向かった、相手が神だと学んだのだ」(S960-961)。ディオニュソスへの嘲りも既に「狂気」のなせる業だったのである。

なれど運命さだめの力は恐ろしい¹⁴。
 富も戦さの精霊も
 高き塔やぐらでも、
 逃れることは出来ぬのだ。(824-833)

アンティゴネ

お願いだから、運命さだめのことなど話さないで。
 知っているから。罪無き私を破滅させる
 男のことを話さない。運命は
 あいつと繋げなさい。
 自分は無事だとは思わないこと、不幸なお前たち。
 さらに死体がいくつも切り刻まれ、
 お前たちの前に放り出され、埋められぬまま、
 埋葬されない兄様の周りに積み重ねられるだろう。
 クレオンのために、国境を越え戦争を引きずって行ったお前達、
 どれほど多くの戦場であいつの運が良くても、
 最後の戦場がお前たちを食るだろう。
 お前たちは略奪を求めていたが、
 目にするのは積荷が溢れる車ではなく、空っぽの車。
 お前たちのために泣いてあげる。私の目に塵が積もるとき、
 生きているお前たちは何を見ることになるだろう！
 愛するテバイ、我が祖国！ そしてディルケの泉！
 そしてテバイを囲む、車がのぼる聖域の森！
 あなたに何が起きるかと思うと
 どれほど頸くびが締め付けられることか！
 そのあなたから人でなしどもがやって来た、
 だからあなたも塵にならなくては¹⁵。
 誰かがアンティゴネのことを尋ねたら、
 墓へ逃げるのを我らは見た、
 そう言ってやると良い。(834-856)
 (アンティゴネは衛兵及び侍女たちと共に退場。)

長老たち¹⁶

あの娘むすめは、背を向け大股で立ち去った。衛兵を率いているかのようだった。広場を通り抜けて。
 戦勝記念の列柱がもう建てられているところに着いた。それから足を早め、消えた。(857-861)

14 フィネウスの子らの話も第四スタシモンから。運命の力についてのコロスの詠嘆はソフォクレスではフィネウスの子のエピソードに対するものではなく、ダナエの話から導かれている (S951-4, H266)。

15 プレヒトは序文の冒頭で、「我らの、不幸でもあり、不幸を作り出してもいる国の全面的な物質的・精神的崩壊 (AM47)」について触れている。ここでもテバイはドイツと重ねられている。

16 アンティゴネの退場のあとに置かれていた第四スタシモンは先行する対話で利用され、このコロスの合唱はプレヒト独自の内容となる。ここからは、物語はソフォクレスからほぼ完全に逸脱する。

だがあれもかつては、暗い岩壁の中で焼かれたパンを食べていた¹⁷。
 不幸を宿す塔の影で¹⁸、ゆったりと坐っていた。
 だがそれは、ラブダコスの家々から、
 死を与えに出て行ったものが死と共に戻ってくるまで¹⁹。
 血塗れの手が身内に獲物を分け与えても、
 身内は受け取らず、引き裂いてしまう²⁰。
 その後で初めて、怒れる娘は野に臥した。
 善きことのために身を投げ出したのだ！
 冷たさが娘を目覚めさせた。
 最後の忍耐が尽き、最後の邪悪を見定めてから、
 目の見えぬオイディプスの子は、
 擦り切れた目隠しを外し、
 深淵に目を向けた。
 だが、テバイは今も目が見えぬまま、
 靴底を上を、よろめきながら
 多くの香草を闇の中で混ぜた
 勝利の酒を味わい、
 飲み干し、歓声を上げている。(862-883)

盲目のテイレシアスがやって来た。あの予言者が。
 反目が広がり、下民の間で騒乱が湧き立っているという嫌な噂に駆り立てられたのだろう。(884-886)

(子供に導かれてテイレシアス登場。クレオンがその後ろに続く。)

17 T, Iは「奴隷たちが焼いた」を補う。ブレヒトは、「改作のためのコメント」で、次のように述べる。「コロスは、彼女もまた長い間不正を容認していたと非難する。彼女は隷属のうちに焼かれたパンを食べ、城の陰で (im Schatten der Zwingburgen) 快適に座っていた。オイディプスの家から与えられた暴力がその家に打ち返されて初めて、彼女は目覚めたのだ」(AM216)。アンティゴネが支配階級に属していることをここでコロスは強調する。ブレヒトは次のように述べる。「古代演劇でのレジスタンスの大人物は、ドイツのレジスタンスの闘士を代表しないし、後者こそが我々にとって最も重要なのである」(AM48)。

18 Türme. Pohl (1988: 251) は前注で述べたブレヒトの「改作のためのコメント」に従って、ここでの「塔」は「城」の詩的な言い換えだとみなす。その場合、何も知らず城に住むアンティゴネと知って抗い野に横たわるアンティゴネの対比となる。ここはブレヒトの創作部分なので、ソフォクレスから原義をさぐることはできない。マリーナは prison towers と訳し、その場合、ドイツの Schuldurm (監獄) や収容所の監視塔との関連を見ることができよう。「不幸を宿す (Unglück bergenden)」塔と言われていることからこちらの解釈を採った。

19 Was von des Labdakos Häusern tödlich ausging/ Tödlich zurückkam, 「ラブダコスの家」はオイディプスたちラブダコスの一族とその国テバイを表す。テバイの総統クレオンもその一族である。アルゴスの殺戮に向かったクレオンは、ポリュネイケスを殺して彼の「死とともに」戻って来た。アンティゴネを目覚めさせるためには、兄の死という「冷たさ」が必要だったのである。

20 ブレヒト全集版の注によれば、「ラブダコス一族が互いに争い親族を引き裂いたこと」(Brecht 1992: 503)。ただし、直前の文脈からは、「血塗れの手」がクレオンを、「身内 (眷属)」が禿鷹を指すとも受け取れる。その場合は、ポリュネイケスがクレオンに殺され禿鷹に食い散らかされていること。

テイレシアス

童よ、ゆっくりと、踊りに動じることなくしっかりと進め。お前が導くのだからな。導く者はバッコスに従ってはならぬ。足の裏を地面から高く上げ過ぎる者は倒れるしかない。勝利の列柱にもぶつかってはならぬ。国中で勝利だと喚き立てておる。この国は戯げばかり！ 盲は目あきに従うが、その盲の後に続くのはもっと目が見えない者たち。(887-899)

クレオン

(テイレシアスを嘲りながら続いて登場)

どうした文句垂れ、何をぶつぶつと、この戦争の何が不満だ？

テイレシアス

それはの、戯げのお主が、勝利の前から踊っておることだな。

クレオン

お前は頑固な老いぼれで、ありもせぬものを見る予言者だが、周りに聳え立つ列柱は見えんのだな。

テイレシアス

見えはせぬ。そして我が分別は欺かれぬままだ。だからこそ我は汝ら親しき友のもとへと参ったのだ。月桂樹の葉も、油脂でつややかな間は我には分からぬ。それと知るの乾いて我の前で音を立ててからだ²¹。あるいは嘔んでその苦さを味わい、これぞ月桂樹と知ることもあるが。(900-914)

クレオン

祭は嫌いか。ならば直ちにそのそら恐ろしい舌で儂らに語るが良い。

テイレシアス

恐ろしきことを我は見た。聞け、鳥占が、早すぎる勝利に酔いしれ、バッコスの舞のけたたましき叫びで耳を塞がれしテパイのために見出せしことを。

我は古き椅子に座し、我が前にありしはあらゆる鳥どもが羽を休める港。そこで我が聞きしは上空でのおぞましき騒ぎ。殺し合う鳥どもが、荒れ狂い、鍵爪で互いを引き裂き合う響き。恐ろしくなり素早く火がつく祭壇を試した²²。だが幸先良き炎はどこからも上がらぬ。油臭き煙が立ちこめ、覆っていた脂は溶け落ちて、生贄の獣の太腿が剥き出しに見えた²³。(915-928)

長老たち

勝利の日にとても不吉な徴、喜びを蝕むお告げです。

テイレシアス

これぞ、吉兆なき狂宴への死のお告げ²⁴。すなわち、この街を病ませしは汝クレオンであると。

21 月桂冠は勝利の象徴である。ここでテイレシアスは長老の一人の月桂冠を取り上げて壊す (AM139)。

22 生贄の牛の太腿を燃やす火の占い。テキストは簡略化されているが、占いの手順とその失敗の様子はソフォクレスに従う。

23 テイレシアスは目が見えないので、ソフォクレスは童が彼に様子を伝えていることを補うがブレヒトは省略している。

24 ソフォクレスの「徴なき供犠の空しきお告げ (φθίνοντ' ἀσήμεων ὀργίων μαντεύματα.)」(S1013) は火の占いが何の徴をも与えなかったために、神のお告げが獲られなかったことを意味する。ヘルダーリン訳は“Der zeichenlosen Orgien tödliche Erklärung” (H261) とする。ソフォクレスのこの箇所のおργιαとは犠牲を伴う祭祀であり、ディオニューソス信仰との特別のつながりも、取り立てて「狂乱」と関わるわけでもなく、占いが何の兆しももたらさなかったことを指す。テイレシアスによれば、鳥占と火占の失敗

我らの祭壇も炉も、非業の死を遂げしオイディプスの子で腹を満たせし犬と鳥とで穢されておるからである。それゆえ、もはや鳥は瑞祥を喚き立てはせぬ。死人の脂肉^{しびとあぶらむきほ}を食ったがゆえである。かかる煙が神々のお気に召すことはない。なればこそ、死者には譲り、あの世に降ったものを責め立ててはならぬ！（929-941）

クレオン

お前の鳥どもは、じじい、お前に都合よく飛ぶのだな。知っておる。儂のために飛んだこともあったからな！ 儂もしみわたれではないので、商売や予言の術^{わざ}に疎いわけではない。だから、サルディスの琥珀金²⁵であれインドの金であれ溜め込めばよい。だが知っておけよ。あの臆病者の埋葬は許さぬし、天のもたらす病とやらも恐れぬ。神を動かす人間などいないと知っているからな。

だがな年寄り、人の中には、権勢を誇っていても、儲けのために酷い言葉を綺麗に繕って喋ったせいで、酷い破滅を迎える奴がいるのだ。（942-954）

テイレシアス

ちっぽけな時間のために自分を偽るには、我は長く生きすぎておる。

クレオン

どんなに年寄りでも、これ以上長生きするは嫌だと思ふものなどおりはせぬ。

テイレシアス

知っておる。だが知っておることはまだある。

長老たち

仰ってください、テイレシアス様。

閣下、予言者に語らせてください。

クレオン

好きに喋ればよかろう。だが値段の交渉はするなよ。予言者連中はどいつも銀^{かね}が好きだからな。

それ自体がお告げ (*μαντεύματα*) なのである。ヘルダーリンは前半の、*ἀσήμερον ὄργιον* (微なき供儀) を *zeichenlosen Orgien* (微なき狂宴) と直訳し、ドイツ語では、*Origie* はバックス信仰を特徴づけると考えられていた狂乱、狂宴との結びつきが強い。その場合、*Orgien* は火の占いの失敗よりも、その直前で語られた、禿鷹が「悪しき、凶暴な狂乱を伴う喚き声 (ein Geschrei/ Mit üblem Wüten schrien sie und wild)」、[かぎつめでお互い同士を引き裂き合う (*zerrten mit den Klauen sich einander*)] 姿を表すと取るのが自然だと思われる。ヘルダーリン訳ではまた、冒頭の「欠ける、無になる」の意味を持つ *φθίω* を「(人が) 亡くなる」と他動詞的に捉え、「死をもたらすお告げ (*tödliche Erklärung*)」とする。つまり、禿鷹の狂乱が人間にとって「死をもたらすお告げ」なのだろう。ブレヒトはこの行はヘルダーリン訳をそのまま用いるが、国全体にバックス舞踊を命じていたために、「微なき狂宴」は、「勝利の徴がないのに国がバックス舞踊で浮かれ騒いでいること」の意味になるかもしれない。Cf. Weisstein (1973: 596)。T「ゆえなき乱痴気騒ぎへの死の宣告」、I「神の前兆も生まない狂喜乱舞をやめよという戒め」はそのように解する。ただし、テイレシアスは「もはや鳥は瑞祥を喚き立てはせぬ。死人の脂肉を食ったがゆえである。かかる煙が神々のお気に召すことはない。」と続け、「微なき狂宴」が供儀の失敗を指すと考えているようにも見える。以下、テイレシアスとクレオンの対話にはヘルダーリン訳の表現が変更を加えられた上でいくつも利用されている。

25 金と銀との合金で、淡黄の色合いから琥珀金 (Elektrum) と呼ばれた。リュディアの首都サルディスの近くのバクトロス河畔で産出される砂金が琥珀金であり、リュディアはそれを原料に貨幣を作った。白色金とも呼ばれる。

テイレシアス

その金を払うのは独裁者たちだと聞くがの。

クレオン

目が見えない奴は、口に入れて嚙んでみて銀貨だと知るものよ。

テイレシアス

お主が我に金を払うことは望まん。戦争では何を無くさずに済むかなど分からぬものだからの。銀か、息子か、それとも権力か。

クレオン

戦争は終わった。(955-972)

テイレシアス

終わったか？ いや、お主に尋ねてしまったな。

我は、お主の言う通り、何も知らぬ。ならば我らのような者は問わねばならぬ。お主の言う通り、我に先は見通せぬのでな、現在と以前とを見て取ることで我が業のうちに止まり、予言者であろう。確かに、我が見るのは童が見ることだけである。勝利の列柱の鉄の覆いがかなり薄い。我は言う、まだ多くの槍を作っておるからだ。今も軍用に毛皮を縫っておる。我は言う、秋になるからだ。魚を干しておる。我は言う、冬の野営があるようだ。 (973-984)

長老たち

それは勝利の前のことで、もう取り消されたのだと思っておりましたが？ 戦利品が鉄や魚とともにアルゴスから今こちらに向かっているのでは？ (985-987)

テイレシアス

警備兵は山ほどおるが、警備されているものが多いのか少ないのかは誰も知らぬ。お主の家には大きな諍いがあったの。ことがうまく成就した後は通常水に流すものだが、その様子もない。お主の息子ハイモンは取り乱してお主のもとを去ってしまった。

それはなぜか？ お主があれの許嫁アンティゴネを岩山の洞穴に投げ捨てたからだ。兄ポリュネイケスに墓を建てようとしたとしてな。

それはなぜか？ お主がポリュネイケスを打ち殺して埋めずに放置したからだ。自分に抗ったとしてな。

それはなぜか？ お主の戦争が彼の兄弟エテオクレスの命を奪ったからだ。

だから我は知っておる、非道なお主は非道に絡みつかれておるのだ。そして、我は銀で愚かになってはおらぬから、二つ目の問いをお主にかけよう。なぜお主は非道なのだ、メノイケウスの子クレオン？ もう少し容易い問いにしてやろう。お主の戦争には鉄が不足だからか？ お主がやったことは何だ？ 愚劣か邪悪か？ お主はまだ邪悪をなし愚劣を続けねばならぬのか？

クレオン

二枚舌の下衆野郎！ (988-1006)

テイレシアス

舌足らずよりは良からう。

さて、我は両方の答えを得ておる。すなわち「なし」だとな²⁶。

26 二つの問いとは、(1) 戦争が終わったのか、という問いと、(2) クレオンの邪悪は鉾山利権を求めてのものなのか、という問い。戦争は終わっていないし、鉾山利権は得られない。アルゴスへの侵攻はテバイでの「放漫財政 (Mißwirtschaft)」に由来するものであった (AM12、『作業日誌』1948年1月5日)。だがそれは失敗に終わるとテイレシアスは告げている。

その「なし」と「なし」を結びつけて、言ってやろう。放漫財政は大儲けを求めて喚くが、見出されるものは「なし」だと。戦争は籬が外れ、その脚を折る。略奪は略奪を生み、冷酷は冷酷を求め。[もっと]は「もっと」を求め、最後に得られるものは「なし」であると。我は以前を振り返り、現在を見回した。お主らは未来を見越して震えておる。

童よ、我を連れ出しておくれ。(1007-1016)

(テイレシアス子供に導かれて退場)

長老たち

閣下、私の髪がまだ黒かったとしても、いままで真っ白になったでしょう。

怒りに駆られたあの男、言ったのは酷いことですが、言わなかったのはさらに酷いことです。

クレオン

ならば儂が言ってやろう。言われなかったことを論じる必要がどこにある？

長老たち

メノイケウスの子クレオン様、男手のないこの街に、若者はいつ戻るのですか？ そして戦争はどうなっているのです、メノイケウスの子クレオン？ (1017-1027)

クレオン

悪意に満ちたあの男がお前たちの目をこの件に向けさせたから言ってやろう。油断ならぬアルゴスが我らに仕掛けた戦争はまだ終わっておらぬし、さほど上首尾でもない。講和を指示したときに少しだけ欠けがあったのだが、それはポリュネイケスの裏切りのせいだ。だが、あれもあれを悼んだ娘も処罰されてくたばった。(1028-1036)

長老たち

こちらであなたのために槍兵の突撃隊を率いた次男ハイモン様もあなたに背いたこと、その件もまだ終わっていません。

クレオン

あんな奴はもう要らぬ。儂だけでなく、お前たちの目の届く場所にも置かぬ。閨への下らん気遣いのために儂を見捨ておって。

メガレウスがまだ儂のために戦っておる²⁷。崩れかけたアルゴスの城壁に休むことなく身を踊らせ攻撃しておる我が息子、鋼に身を固めたテバイの若武者がな。(1037-1049)

長老たち

兵は無尽蔵じゃない²⁸。メノイケウスの子クレオン、我らはずっとあんたに従ってきた。国には秩序があった。あんたはこちら側の、テバイの中にいる敵ども、無一文で戦争で良い稼ぎを得る盗っ人の民衆から我らの首を守ってくれた。それから諍いで生きる連中、胃袋が長くて肺が大きく、金を貰って、あるいは貰えなくて市場で喋りまわっている扇動屋どもからも。

そいつらはいままた喚き立てているし、面倒な材料も手にしている。メノイケウスの子、あんたは手に負えないほど大きなことに手を出したんじゃないのか？ (1050-1061)

クレオン

儂はアルゴスへの軍を率いたが、行かせたのは誰だ？ 槍の鋼が向かったのは、山の鋼を手に入れるため。お前たちの命令だ。アルゴスは鉄鉱が豊富だからな。

27 メガレウスはソフォクレス版では戦争中に死んだものとして言及されている。ここからブレヒトの物語はソフォクレス版の枠組みから離れる。

28 ここでコロスはクレオンを取り囲み、その言葉の調子が完全に変わるとAM (149) は述べている。

長老たち

ならば槍も豊富だろう。我らは多くの嫌な話を聞いたが、それを伝えた連中をはねつけたのはあんたを信じたからだし、耳をふさいだのは恐怖を恐れたからだ。あんたが手綱を強く締めると、我らは目も閉ざした。もう一段だけきつい手綱が、もう一度だけ戦闘が必要だとあんたは言ったからな。だがいまではもうあんたは我らのような者まで敵扱いし始めた。ひどいことに、あんたは内と外で二重の戦争を行っている。(1062-1076)

クレオン

お前らの戦争だ！

長老たち

あんたのだ！

クレオン

儂がアルゴスを手に入れた暁にはまた立派にお前らの戦争だ！ もう充分！ あの強情な娘はお前らと、あれの言葉を聞く連中を惑わせた！

長老たち

確かに、妹が兄を埋葬するのは正義だ。

クレオン

確かに、司令官が裏切り者を罰するのは正義だ。

長老たち

剥き出しのままぶつけば、その正義とこの正義は我らを深淵に突き落とす。

クレオン

戦争が新しい正義を作り出す。

長老たち

だが古い正義で生きるのだ。そのために必要なものが与えられないなら、戦争は自らを食ることになる。(1077-1088)

クレオン

恩知らずが！ 肉は食うが、コックの血塗れのエプロンは気に入らんか！ お前らに儂は、剣戟の音が聞こえないような家を建てるようにと白檀をくれてやった。だがその白檀がとれたのはアルゴスだ！ 儂がアルゴスから持ち込んだ鉄板を返した者など誰一人おらぬ。だが、お前らはその鉄板の上でしゃがみこんで、向こうでの虐殺について喋り、儂が横暴だと嘆きおる。儂はもう慣れておるが、略奪品が届かなければ、お前らはもっと酷く怒り出すだろう。

長老たち

あんた、テバイはいつまで男手なしでいなけりゃなんのだ？

クレオン

その男たちが豊かなアルゴスを勝ちとるまでだ。

長老たち

死んでしまう前に呼び戻してくれ、この人でなし！

クレオン

手ぶらでか？ 誓ってそれがお前らの注文なのだな。

長老たち

手ぶらでも手なしでも、生身の全部を返してくれ！ (1089-1101)

クレオン

むろん。すぐにアルゴスは落ちる。その時にはすぐに呼んでやる。儂の長男、メガレウスが男た

ちをお前らのもとに引き連れてくるだろう。気をつけろよ。門も扉も男たちには小さ過ぎるかもしれん。たとえ下で這いずっている連中にとっては高さが十分だとしてもな。大きな体格の男たちの肩がこっちでは宮殿の門を、あっちでは宝物庫の扉をぶち壊してしまうかもしれん。再会の嬉しさのあまり、握手したときにお前らの手や腕を揺さぶり関節を外してしまうかもしれん。お前らの不安な胸に勢いよく甲冑が突撃してきたら肋骨に気をつけろよ！ 喜びの日には悲しみの日よりもずっと抜身の鋼を見ることになる。勝利に尻込みする大勢の者が、鎖の冠を被り膝を折って踊ることになったのだ。

長老たち

酷い！ 自国の軍で我らを脅すのか？ 今度は味方に我らを鞭打たせるつもりか？

クレオン

その件は、我が子メガレウスと話し合う所存である。（1102-1118）

（戦場からの伝令が登場）

伝令

閣下、動ずることなくお聞きください。私は凶報を告げる伝令です。

性急な祝いを止めてください。勝利を信じるのが早すぎたのです。

新たな戦場で、お味方はアルゴスに敗れ、敗走中です。

ご子息メガレウス様はお亡くなりになりました。

八つ裂きにされアルゴスの固き大地にお斃れです。

閣下がポリュネイケスの逃亡を処罰し、それを恨む多くの兵を捕らえて公開で絞首刑にし、御自分は急ぎテバイに戻れると、ご長男は我らを新たな戦場へと追い立てました。我が突撃隊は、自軍での血の海を眠りで忘れることもできぬまま、疲れ果て、テバイ人の血に濡れた斧を今度はアルゴス人に振りかざしたのです²⁹。振り返ってメガレウス様の方を見る顔はあまりに多かったです。あの方は、敵よりも味方の兵にとって恐ろしくあろうとして、おそらくは、駆り立てる声がかびしすぎたのです。（1119-1136）

それでも、戦場の運は初めは我らの側にあるかと思われました。戦いそれ自体が戦意を煽り、味方のであれ敵のであれ、血の匂いは同じで人を酔わせます。勇気では無理なことでも恐怖ならやり遂げられるのです。しかし、地形、装備、糧食も関わってきます。そして閣下、アルゴス人の戦い方はずるかった³⁰。女も戦い子供も戦った。焼け落ちた屋根からは、長い間食い物など入ってなかった大鍋が、煮えたぎる熱湯とともに我らの上に投げ落とされた。無事に残っていた家にも、もうどこかに住むことなど誰も考えていないかのように、我らの背後で火がつけられました。家財道具も家もシャベルになり、武器になりました。それでもご子息は我らを前進させ、街の奥深くに追い立てたのです。街は荒れ果て、今や墓場に変わり果てていました。その廃墟は我らを分断し始めます。占拠した区画の全てに煙が上がり、火の海が我らの視界を覆い隠しました。我らは火を逃れながら、敵を求めて味方に討ちかかります。ご子息が誰の手に掛かったのかを知るものはいません。

29 「ポリュネイケスの逃亡を……」以下（1128-1132）はクールでの舞台用台本では次のようになっている。「閣下がポリュネイケスの反乱を残酷に弾圧し、あの裏切り者の死骸を故郷の街の前に投げ捨てるためにテバイに急ぎ戻れると、メガレウス様もまた、驚きのせいで臆病な心がなくなることを目論んで私どもを新たな戦場へと追い立てられました。こちらで戦勝の祝いの用意を慌ただしく整えているからには、疑いはすべて消し去って勝利をもたらさねばならぬと。かくして、ご長男は留まることなく戦場を押し進めて行ったのです。」（Brecht 1992 : 494）

30 序文（AM23）でブレヒトはアルゴスをスターリングラードに擬えている。

テバイの榮華はすべて消え去り、テバイ自身もう長くはないでしょう。いまアルゴスの民が、兵と戦車を引き連れ、全ての街道からこの地へ向かってきているのですから。それを見てしまった私は、自分が今死んでいくのが嬉しい。(1137-1163)

(死ぬ)

長老たち

なんてことだ！

クレオン

我が子メガレウス！

長老たち

嘆きで時間を無駄にするんじゃない。突撃隊を集めろ！

クレオン

ないものを集めろだと！ざるで掬うのか！

長老たち

テバイは勝利に酔って跳びはね、その間に、灰色の鉄剣を持って、至るところから敵が近づいてくる。あんたは我らを欺し剣を手放した。今やっともう一人の息子のことを思い出したんじゃないか。若い方を呼んでこい！

クレオン

そうだ、ハイモン、末の息子！ 大崩壊の中を助けにきてくれ！

儂が言ったことは忘れる。あのとき儂には権力があつたが、自分の心を抑える能力はなかつたのだ。

長老たち

急いで岩山へ行き、兄の墓を盛った娘をすぐに出すんだ！ アンティゴネを解放してやれ！

クレオン

あれを掘り出せば、お前らは儂の側に立ってくれるか？ 儂に要求しなかつたときも、お前らはすべてを認めていた。一蓮托生だぞ！

長老たち

行け！

クレオン

斧だ！ 斧をよこせ！ (1164-1188)

(クレオン退場)

長老たち

踊りをやめろ！

長老たち³¹

(シンバルを打ち鳴らしながら)

31 長老たちの詩の最初四連 (B1190-1215) のかなりの部分はソフォクレスの第五スタシモン (S1115-1154) のヘルダーリン訳 (H275-276) を利用し、プレヒト独自のイメージと混ぜ合わせている。絶望的な状況でディオニュソスの来臨を願うのは共通。

32 デイオニュソスのこと。

33 Wassern (H275, B1190)。ソフォクレス (S1116) の「カドモス一族の姫御の誇り (Καδμείας νόμφας ἄγαλμα)」でディオニュソスの母セメレを指していた νόμφη を、ヘルダーリンはテバイを特徴付ける川や泉を指すと捉えたのだろう。ここではイスメノス川が挙げられているが、アンティゴネの最後の嘆き (S843, B849) ではディルケの泉が挙げられていた。

歓びの精霊³²よ、カドモスが愛した水辺³³の誇り、
 あなたの国をもう一度ご覧になりたいなら
 おいでください。急いで旅し、
 夜になる前においでください。
 その後ではもう国はないのです。(1190-1195)

歓びの神よ、まさにこの母なる国、
 バッカイ³⁴の国テバイ
 イスメノスの冷たき流れのほとりに
 あなたはお住まいでした。
 屋根の上に美しく漂う³⁵
 生贄の煙があなたを見ていた。(1196-1200)

それら多くの家のかまどの火も、
 火から上がる煙も、
 煙の影³⁶すらも、出会うことはなくなるでしょう。
 一千年の間、テバイの子らは、
 遙か遠き海岸に坐したままでも見ていたものを。
 だが明日は、いや今日は
 頭を載せる石すら持っていない。(1201-1207)

あなたの時代、コキュトス³⁷でも、
 歓びの神よ、そしてカスタリアの森³⁸でも
 あなたは愛する者たちと坐しておられた。
 鍛冶屋を訪れ、
 笑いながら親指で剣の鋭さを試された。

34 ディオニュソスの女性信者たち。

35 ソフォクレスの「岩山の二つの頂 (*διδόφου πέτρας*)」(S1126) がヘルダーリンで「岩山の両肩 (Des Felsens Schultern)」(H275) と訳され、それがブレヒトで「屋根の肩 (Des Daches Schultern)」(B1200) とテバイの街の話に変更されている。

36 「煙の影 (Vom Rauche den Schatten: B1202-1203)」は、ソフォクレスでは、ハイモンの死を告げる「使いの者」が、たとえ大きな富を持っていたとしても、「幸いのない」生活のためには「煙の影」(S1170, H277) ですら支払うつもりはないと語っていたが、その表現を借用したもの。

37 ソフォクレス (S1128) の「コリュキオン (*Κορύκτιαι*)」をヘルダーリン (H275) が「コキュトス」と誤読したのをブレヒト (B1208) がそのまま用いた。コリュキオンはデルフォイ北東の鍾乳洞で、ソフォクレスでは「バッコスに仕えるニュンフたちが行き交う洞窟」とされていた。他方、コキュトスは「嘆く (*κακῶ*)」から派生した名詞でハデスの川の一つである「嘆きの川」のこと。ブレヒトの文脈でも、ハデスの「嘆きの川」は歓びの神ディオニュソスを求めるコロスの願いにも、テバイ周辺の「カスタリアの森」という記述にも合わないなのでその含意はなかったように思われる。

38 ソフォクレス「カスタリアの流れ (*Κασταλίας τε νῆμα*)」(S1130) をヘルダーリンが「カスタリアの森 (Kastalias Wald) (H275)」と訳したのを継承。カスタリアはデルフォイの上、パルナッソス山の湧き水が作り出す泉。

しばしば不滅の歌に導かれテバイを訪れ、
人がまだ喜び集っていた街並みを歩かれた。(1208-1215)

ああ、鋼がその持ち主に打ちかかった、
それでも疲れは腕を食っている。
ああ、暴力を揮うには奇跡が、
寛容には少しばかりの知恵が必要だ。(1216-1219)

だが、酷く打ちのめされた敵は、
今や我らの
宮殿を見下ろす場所に立ち、
七つの門の入り口を囲み、
血塗れの槍を見せつけている。
我らの血で頬を染めるまでは
立ち去りはしない³⁹。(1220-1227)

だがあそこ、逃げ惑う人混みをかき分けて近づいてくるのは^{はしため}婢女の一人。救いとなる突撃隊を父親が委ねたハイモンについての知らせを持っている筈。(1228-1231)

(婢女が伝令の女として登場)

伝令の女

ああ、多くが無駄になってしまいました！ 最後の剣が折れたのです！
ハイモン様はお亡くなりです。自ら我が身を手にかけたのです。

私はこの目で見た証人。その前に起きたことは、犬に食いちぎられたポリュネイケスの可哀想な亡骸が横たわっていた小高い野原へと、ご主人と共に向かった下男たちから聞きました。下男たちは、何も言わずに亡骸を洗うと、その残っている部分を⁴⁰若枝の中に横たえ、丁寧に、故郷の土で小さな塚を盛ってやったとのことです。ご主人も、他の者たちを引き連れて、私たち婢女のいた岩穴の墓へと急いで来られた。そのとき、声が聞こえ、大きな嘆きが墓室の中ではっきり響きました。ある者が、ご主人に報告するために駆けて行きました。ご主人は急いだ。近づくにつれ徐々にはっきりとその耳を覆うのは、暗く苦しみに満ちた声。ご主人は金切り声をあげ、その場に近づく

39 「今や我らの……立ち去りはしないのだ」(B1221-1227)はソフォクレス版のコロスの入場歌からS117-120の「街並みの上に降り立ち／血に飢えた槍で／七つの門の入り口を／一飲みにせんと取り巻いたが、／我らが血を嘴で貪り尽くす前」に対応するヘルダーリン(H228)の翻訳を現在時制に変えてほぼそのまま利用している。ソフォクレスで「降り立ち」となっているのはアルゴス軍を鷲に喩えているため。

40 「その残っている部分(ὁ δὴ ἄλλοιππο (soviel übrig war))」(S1203, H278, B1239)。犬に食い散らかされた亡骸の残っている部分を集めて用意した若枝の中に置いた。但し、T, Iは「若枝」の部分と考えている。また、ソフォクレスでは塚を盛る前に遺体を焼く(συγκατῆθμεν)が、火葬はヘルダーリンですでに脱落している。ポリュネイケスの埋葬は省略を含みつつもヘルダーリンに従っているが、ソフォクレスが伝令による直接の経験としているのに対しブレヒトは伝聞にしている。ハイモンの死はどちらにおいても直接の目撃証言である。

と、岩壁^{いわかべ}から引きちぎられた門を見て哀れな嘆きを口にし、自分に言い聞かせるかのように、「あれは我が子ハイモンの声ではない」と、やっとのことで口にされます。不安に駆られたご主人の言葉に従って私どもは探しました。そして、墓穴の一番奥に見えたのは、首を括ったあの方、アンティゴネ様です。亜麻布を縄にして首に巻きつけていました。そして、高くぶら下がったあの方の足元に手を伸ばしているハイモン様。花嫁の新床、その下に広がる深淵、お父上の所業をお嘆きでした。その様子をご覧になると、ご主人は中に入ってハイモン様に近づき仰いました⁴¹。「出て来ておくれ、息子。膝をついての頼みだ。」だがご息子は、冷たくそちらに目を向けると、何も言い返さず睨み付け、両刃の剣を抜いて打ちかかりました。父君が驚いて跳び退き身を翻して逃げたので、それは失敗に終わります。ご息子はそれ以上何も言わずに、立ったまま剣先をゆっくりとご自分の脇腹に突き刺します。声も上げずに倒れたのです。死体が死体の傍らに横たわり、婚礼の儀はおずおずと、冥界の館で執り行われています。

さあ今、ご主人御自らがご到着です。(1232-1272)

長老たち

もうこの国は終わりだ。手綱に慣れていたのに、手綱はもうない。

子どもに支えられて、失敗した男がやってくる。

抱えているのは、愚かな暴走の大きな記念品……

(クレオン、ハイモンの上着を抱えて登場)

クレオン

見ろ、儂が持っているものを、上着だ。剣を取りに行き、持ち帰れると思ったのに。子供は儂より先に死んでしまいおった。あと一度戦えばでアルゴスは地に落ちていたのに！ やつら、気力を極限まで振り絞り、ひたすら儂に刃向かいおった。

かくていまパイは滅びる。滅びれば良い。儂と共に滅びれば良い。消えて秃鷹の餌になれば良い。今の儂の願いはそれだ。(1273-1285)

(クレオンは婢女たちと退場)

長老たち

そしてあいつは向きを変え、ラブダコスの家すべての血に塗れた布切れだけを手にして、崩れゆく町へと向かって行った。

だが我らはみな、

この期に及んでもあの男に従い、

地下への道を進み行く。

縛られるべき我らの手は、

もう殴ることのないように切り落とされる⁴²。

41 クレオンの呼びかけからハイモンの死 (B1172) までは、かなりの省略と僅かな変更を加えつつヘルダーリン訳 (H279-280, S1230-1241) を用いる。

42 “Abgehaun wird/ Daß sie nicht zuschlag mehr/ Uns die zwingbare Hand” (B1292-1294). Tは「我らを無理強いした手は打ち落されて、もはや我らを打ちのめしはしない」と訳す。Iもほぼ同様。これは die zwingbare Hand をクレオンの手と捉えコロスを被害者とみなす読解である。この読解はブレヒトの文脈とは合わない。コロスがクレオンに従ってきたのは、彼ら自身が、クレオンが言ったように「一蓮托生 “Das verwickelt euch!” (B1185-1186)」だったからである。「縛りつけられるべき手 (die zwingbare Hand, B1294)」はコロス自身の手である。この点は二種類の英訳はともに “Our biddable

だが、全てを見通したあの娘は
 敵を助けるしかなかった。敵は今にもやって来て
 直ちに我らを消し去るのだ。時は短く
 見渡す限り不幸しか見えない。
 だから、決して十分ではない、
 思慮なく安易に、邪悪の黙認から邪悪そのものへと墮ち⁴³、
 老いてから賢くなる人生では⁴⁴。(1286-1300)

1951年ベルリン上演のための新しいプロローグ

(舞台上にはアンティゴネ、クレオン、予言者テイレシアスを演じる俳優たちが登場する。テイレシアスを演じる俳優は、他の二人に挟まれて、観客に向き合う。)

皆さん、皆さんには何千年も前の詩の高尚な言葉遣いは馴染みがないかもしれません。それをここで私たちは稽古しました。

詩の素材も、もともとの観客には慣れ親しんだものだったのですが、それも馴染みがないですね。だから私たちがここで皆さんに紹介をしても構わないでしょう。

こちらがアンティゴネ、オイディプス一族の領主の娘。こちらの方はクレオン、テバイ国の独裁者、アンティゴネの伯父です。私はテイレシアス、予言者です。

ここにこの男が、遠いアルゴスへの侵略戦争を指揮します。

この娘は非人間的な所業に抗い、男は娘を殺します。

だが彼の戦争は、いま非人間的と呼ばれましたが、大失敗に終わります。

不屈の正義を持つこの娘は、屈従した民衆の犠牲をも顧みず、戦争を終わらせたのでした。

お願いしたいのは、皆さんの心で、ごく近い過去に似たような出来事があったのではないかと、あるいは、似たような出来事はなかったのではないかと探してくださることです。

それではこれから、私たちと他の役者たちが、芝居をするために次々にこの小さな舞台に現れるのを皆さんはご覧になるでしょう。ここはかつて太古の昔に、野蛮な生贄の儀式のために用いられた獣の罅⁴⁵の下で、人間らしさが大いなる反乱を起こした場所なのです。

(俳優たちは後ろに戻り、他の俳優たちも舞台上に登場する)

Hand” (C) “Our violent Hand” (M) と理解している。その手が、いまや「我らから切り落とされる」のである。

43 “undenkend und leicht / Von Duldung zu Frevel……zu werden” (B1298-1300). アンティゴネの道行のあと、コロスは彼女が「最後の忍耐 (die letzte Geduld) を使い果たし、最後の邪悪 (die letzte Frevel) を見定めてから」(B875) 善にめざめたと述べていた。他方アンティゴネは、自分の訴えに応えないコロスに対して「ならあなたたちは黙認するんだ (ihr duldet's)」(B427) と非難していた。

44 この最後の行 “Weise zu werden im Alter. (B1300)” はソフォクレスの最後の行「老いたる後に思慮を教えるのだ “γῆρα τὸ φρονεῖν ἐδίδαξαν (S1353)” “Sie haben im Alter gelehrt, zu denken. (H285)”」を想起させる。ただし、プレヒトではそれでは手遅れなのである。

45 舞台は中央に照明が当てられ演技空間になる。その四隅には先端に馬の頭蓋骨を載せられた柱がおかれ、俳優たちはさらにその外側を取り囲むように椅子に座って舞台を眺め、自分の番が来たら立ち上がって中の演技空間に入る。

解説

ブレヒトの『ソフォクレスのアンティゴネ：ヘルダーリンの翻訳による舞台用改作』は1948年にスイスのクールで初演された、第二次世界大戦後にドイツ語で書かれた最初のブレヒト作品である。作品自体は、ヘルダーリンによるソフォクレス版の『アンティゴネ』からの翻訳を用い、省略を加え、また、後半を中心にブレヒト独自のテキストをかなり挿入し、異なった物語にしている。

1 ベルリン

ブレヒトは、『アンティゴネ』本編の前に、第二次世界大戦末期のベルリンを舞台とする短い「序劇」を置いた。ここでは、ソフォクレス版と同様、二人の姉妹が登場する。戦場を逃亡した兄が戻っていた痕跡を家の中に見つけて姉妹は喜ぶ。ところが、表から騒ぎが聞こえ、確認してみると、兄はSSによって街灯に縛り首にされていた。姉妹はそこで、たとえ兄がもう死んでしまったとしても、目の前のSSを殺害して兄を街灯から下ろすべきではないのかという決断を迫られる。古代ギリシアのアンティゴネの決断に対応する決断を、1945年のベルリンに置き換えた序劇である。

2 テバイ

ソフォクレスの原作では、テバイでの王位争いに破れたポリュネイケスはアルゴスを頼り、その軍勢を率いてテバイを攻める。七つの門に守られたテバイでは、その門の一つ一つで將軍たちの戦いがあり、テバイの将が侵略者を退ける。ただし、テバイ王エテオクレスが兄ポリュネイケスと一騎打ちをした第七の門での戦闘は両者の相打ちとなり、物語は、侵略軍の将として祖国を攻撃し弟エテオクレスとともに斃れた兄ポリュネイケスの埋葬を巡って展開する。

ブレヒトではテバイは鉄鉱資源を求めてアルゴスに侵略戦争を行っている。若者は派兵され、国に残るのは老人と女たちである。エテオクレスはアルゴスで酷い戦死を遂げ、ポリュネイケスはその様子を目撃して戦線を離脱しテバイに一人帰ろうとする。だがテバイの町に至る直前にクレオンに捕まり惨殺される。ポリュネイケスの遺体がテバイの町の外で、野犬や禿鷹が食い荒らすままに放置される点は原作と変わらない。

ポリュネイケスを処刑したクレオンはそのままテバイに戻り、アルゴスが陥落したと告げ、ポリュネイケスの埋葬を禁止する。その後の物語は、テイレシアスが登場するまでは、ほぼ原作通りに進む。ただし、アンティゴネとクレオンの論争の中で問題になるのは、もはや兄の埋葬ではなく、侵略の是非である。戦争に対する市民的抵抗のテーマは原作にも既にあちこちに見いだされるが、ブレヒトでは、ポリュネイケスの埋葬の是非が「二種類の正義」としてヘーゲル的に問題になることはない。正義は一貫してアンティゴネの側にあり、クレオンは略奪を好む侵略者である。

3 コロス

そこで問題になるのはコロスのあり方だ。この対立の中で、コロスはどのような立場に立つのか。まず、テバイの長老としてのコロスと、語り手としてのコロスを区別しなければならないだろう。

「語り手としてのコロス」と述べたが、コロスは物語世界の外にいる三人称の語り手ではない。ブレヒトの「叙事演劇」は、登場人物を通じた「語り」の可能性を追求していることを大きな特徴

としている。すでに序劇でのベルリンの姉妹の台詞が、その場で行動し演じている人物としての言葉と、その行動を回顧的に叙述・評価している「語り手」としての言葉を自由に混ぜ合わせているが、序劇では語り手は「姉妹」それぞれの人格的同一性を逸脱してはいない。形式的には、彼女たち自身の未来からの回顧的な語りなのである。しかしながら、姉妹の「物語る現在」は明示されておらず、むしろ、物語世界の延長上に姉妹が語る時間が存在しているようには思えない、そうした独特の「回顧的」な語りになっている。

コロスの場合はどうだろうか。まず、登場人物としてのコロスは「長老」であり、テバイの民衆とは端的に同一視されていない。アンティゴネが「お前たち大金持ちよ」と呼びかけているところからも分かるように、コロスは支配階級のメンバーとして捉えられている⁴⁶。その意味で、彼らはテバイの支配的イデオロギーを代表している。それを端的に表しているのが、クレオンの最初のコロスへの呼びかけにある次の言葉だ。

(諸君が) 敵を踏みにじる戦車の車輪の数を戦さの神に数えたてはせず、子息らの血を戦場で惜しみもしていないことを農は承知しておく。

クレオンは、コロスを、戦費も戦死者数も構わず総力戦で臨むことに同意した幕僚として取り扱っている。ポリュネイケスの遺骸を野ざらしにする提案へのコロスの応答も、ソフォクレスでは

この国の敵と味方を、そのように扱われるのが王様のご意向でございますか。死んだ者に対してであれ、生きている私たちに対してであれ、確かに王様はどのような法でも用いることがお出来でしょう。

と、王としてのクレオンに対する服従を前提としているのに対し、ブレヒトでは「承知しました」と端的な同意になっている。これらは、戦争に対するクレオンとコロスの立場に差異がないことを示している。登場人物としてのコロスがクレオンに異を唱えるのは、テイレシアスの言葉に怯えたコロスに対し、クレオンが「戦争はまだ終わっておらぬし、さほど上首尾でもない (B1030-1032)」と語ってからである。後にコロスがクレオンに抗い始めたときにクレオン自身が言うように、コロスはクレオンと「一蓮托生 (Das/ Verwickelt euch)」(B1186) なのである。

アンティゴネに対する態度もブレヒト版ではソフォクレスよりも冷たい。コンモスに対応する箇所、衛兵に曳かれるアンティゴネを目にしたとき、ソフォクレスのコロスは「掟の外へと (aus dem Gesetze, H259)」運ばれてゆくと述べるが、ブレヒト版ではパッコス讃歌の「拍子を外し (aus dem Takte, B745)」たに過ぎず、この場面でアンティゴネは最初からコロスの言葉に嘲りを認めている⁴⁷。これは、ニオベに自身を擬えたアンティゴネに対し、コロスが「生きている間であれ、死

46 この呼びかけは、ソフォクレスの“πολυκτήμονες” (S842) へのヘルダーリンの訳語“vielbegüterten” (H261) を用いている。ソフォクレスでは「豊かな人々」に対しアンティゴネは敵対的ではないが、ブレヒトでは敵対的である。また、後に見るように、ソフォクレスではアンティゴネは権力者を表す語である *κοριονίδα* (S940) を、テイレシアスは王を意味する語の複数形である *ἄνακτες* (S988) を用いてコロスに語りかけている。ただし、ソフォクレス版のコンモスの冒頭でアンティゴネは「父祖の地の市民たち (ὦ γὰς πατρίας πολῖται (S806), Bürger der Vaterstadt, (H260))」と呼びかけているが、これはブレヒトもヘルダーリン訳を踏襲しており (B749)、コロスに「市民」を代表させている箇所もある。

47 他方、コロスがアンティゴネに明確な敵意を向けることはなく、やや同情的であることも確かだ。

んだ後であれ、／神様のお子たちと同じ定めを受けたと言われるのは／亡くなった女には確かに大したことです。」（S836-838）と揶揄されて初めて怒りを示すソフォクレス版とは異なる。

ブレヒトが特に強調するのは、「市民たち」の間の分裂である。アンティゴネとの対話で、クレオンはアンティゴネが「テバイの屋根の下に分裂を持ち込もうとする（B430）」と非難する。潜在的には存在していた「分裂」は、結局アンティゴネ以外の行動として顕在化することはなく、その不在こそがアンティゴネにとっての悲劇だった。アンティゴネはコロスに不服従を訴えるが、コロスが「この男のために口を閉じて（B497）」いることを確認するに終わる。だからこそ彼女は最後に「愛するテバイ」に「そのあなたから人でなしどもがやって来た、ならばあなたも塵にならなくては（B852-854）」と語りかけたのである。

登場人物としてのコロスが、アンティゴネに対しクレオンほどの激しい敵意を向けることはないとはいえそれでもクレオンの忠実な臣下であるとして、語り手としてのコロスはどうだろうか？すでに述べたように、ブレヒトは、戦時下のベルリンを舞台にした序劇で、回顧的に語る「物語世界的」な語り手を登場させていた。序劇の「姉妹」、とりわけ「姉妹1」は、登場人物としての台詞を語り、また、まるで小説の地の文のように、自分たちの行動についての説明を行う。これは一人称小説と同様である。しかし大きな違いがあって、一人称小説とは異なり、序劇においては、語り手が語り手として語る言葉と、登場人物として語る言葉との間に引用符等の標識上の区別はなく、それゆえ、ある台詞について、登場人物による「台詞」なのか、語り手による「叙述」なのかを区別することは常に決定可能だとは言えず、解釈の領域に属することになる場合も多いという点だ⁴⁸。この点では、姉妹の言葉は、小説の地の文の中に混入する登場人物の言葉である「自由間接話法」と、逆方向の類似を持っているだろう。また、「姉妹1」がこの種の「回顧的な語り」の主要な担い手であるにせよ、「姉妹2」にもその役割が与えられていることも、語り手の変更がそれほど容易ではない小説と比較しての、演劇というメディアの可能性を示すものである。

本編に入ると、主要登場人物によるこのような特殊な回顧的な語りは消える。ただし、登場人物による回顧的な語り自体は、舞台の外の出来事を後説法と要約法を用いて演劇が提示するための主要な手段であり、ギリシア以来演劇的伝統の中で重要な役割を持ち続けてきた。特に舞台上での殺人を描かないギリシア悲劇では「伝令の報告」は極めて重要だった。また、プロロゴスでは、神や、場合によっては主要登場人物の一人が、劇の始めの状況に至るまでの出来事を要約的に語ることが多い。登場人物による要約的な後説法は本作でも十分に利用されている。それらは直接観客にではなく、コロスを含めた舞台上の人物に向けて語られる。ポリュネイケスの遺体の見張りや、メガレウスの死を告げる伝令の男はクレオンに、ハイモンの死を告げる伝令の女はコロスに対して、舞台上での報告として、回顧的に語るのである。

他方、「語り手」としてのコロスは「登場人物」としてのコロスとどのような関係にあるのだろうか。ギリシア悲劇において、コロスは、スタシモンと呼ばれる合唱歌部分において、伝説を歌い、神々に祈り、直前の対話部分（エペイソディオン）の出来事に反応し、自らの状況を嘆き、あるいは未来を予測して怯える。また、特に退場歌においては、悲劇全体の要約や一般的な教訓を伝えることもしばしばある⁴⁹。ただし、入場歌、スタシモン、退場歌では、コロスの「語り」の受信者となる人物は存在しない。「語り」は自らに向けて、あるいは観客に向けて「歌われる」のであ

48 例えば本作品の「序劇」においても、「台詞」としての言葉と「語り」としての言葉の区別は訳者によって異なる。先行訳に比べて、本訳では「語り」として理解する箇所が多い。

49 退場歌は使い回されることもあり、その場合作品の内容との関係は失われる。

る。俳優が演じる登場人物とは異なり、コロスにはもともと個性的な人格が与えられているわけではなく、「テバイの長老たち」「アルゴスの娘たち」といった大きな集団的な属性が与えられているだけなので、その「歌唱」の内容と彼らのアイデンティティとの関係はそれほど緊密にはなりえないにせよ、退場歌以外でのコロスの「語り」は、基本的には、「登場人物」としてのコロスが語りうることからの範囲に収まっている⁵⁰。

ブレヒトが加筆・訂正した部分はどうか。ソフォクレスでは「人間讃歌」として知られる第一スタシモンでは、ブレヒトは最後の10行(B300-310)を独自のテキストに変更している。それは、「己の敵がいなくて／人は自らを敵とする」という格率で始まり、同胞同士で殺し合い、奪い合うことを人間の本質とし、「人には人が凄まじい(ungeheuer)」と終わる。クレオンによるアンティゴネへの断罪がなされた後に挿入される第二スタシモンは、ソフォクレスでは、ラプダコス一族の悪しき滅びの運命への哀悼だったが、ブレヒトは「ラクミュスの兄弟」の復讐譚というオリジナルの物語で置き換え、「積み重ねられた悲惨は、ほんの小さな事柄で熟して終わる」(B559)という教訓を引き出している。ラクミュスの兄弟は、虐待をただ耐え忍んでいたが、ペレアスが二人を杖で打ったことで堪忍袋の緒が切れ、「虐待者どもみなを打ち殺した」(B556)のである。ここではコロスは直前のアンティゴネへの死刑の宣告が過大ではないかとの不安を表明している。クレオンとハイモンとのやり取りに続く第三スタシモンは、ソフォクレスではハイモンのアンティゴネへの愛を受けた「エロス讃歌」であるが、ブレヒトは、アンティゴネの断罪の後、クレオンが「バックスの舞(Bacchusreigen)」(B533)とともにアンティゴネを殺害することを予告したのを受けた「バックス讃歌」に変更する。これら三つのブレヒト版「スタシモン」は、作者からのメッセージとして理解できる一定の教訓的言明を含んでいるが、登場人物としてのコロスがその時点で語りうる範囲に留まっている。

しかしながら、アンティゴネの道行きに続く第四スタシモンに対応する長老たちの語りは、その時点でコロスが語りうる範囲を明確に逸脱している。自らの墓へ向かい「大股で立ち去った」アンティゴネを目撃したコロスは、まず、彼女が「最後の忍耐が尽き、最後の邪悪を見定め」る(B874-876)までは、「暗い岩壁の中で焼かれたパンを食べ」(B862-863)「不幸を宿す塔の影で、ゆったりと坐っていた」(B864-865)と批判的な視点から彼女の反抗について語る。兄が殺されて初めて、「冷たさが娘を目覚めさせ」(874)、彼女は「善きことのために身を投げ出した」(B872)のだと。

序劇が大戦末期のベルリンを舞台にしていたことから分かるように、ブレヒト版の『アンティゴネ』は、クレオンのテバイとヒトラーのドイツを重ね合わせている。劇中で見張りから「総統」と呼びかけられているクレオンはヒトラーであり、コロスは彼を支える支配階級の男たちである。物語世界にも、その時間的な延長上にも、アンティゴネが「善きことのために身を投げだした」(B872)と語りうる視点をコロスは持ち得ない。つまり、ここではコロスは物語世界外の「語り手」としてアンティゴネの行動を評価している。アンティゴネについての批判的視点は焦点化を欠いた外部からのものだ。

エクソドスに対応する長老たちの最後の語りの視点はそれとは少し異なる。ここでは、「我らは／この期に及んでも(auch jetzt)みなあの男に従って、／地下の道を進み行く」(B1290-1292)と、語り手としてのコロスの批判は自己自身へと向かう。ここで興味深いのは、コロスが自己弁護や正当化を行っていないことだ。「縛られるべき我らの手は、もう殴ることのないように切り落と

50 エウリピデスには、コロスが作者を代理して作品への承認を求める退場歌が見出される。

される」(B1292-1294)で、「切り落とされる」のはコロス自身の「手」である。そしてそのようなコロスと対比して「すべてを見通したあの娘は／敵を助けるしかなかった。(Aber die alles sah/Konnte nur noch helfen dem Feind)」(B1294-1296)とアンティゴネを振り返るとき、そこに彼女への否定的評価の入る余地はない⁵¹。

この「エクソダス」でも、「第四スタシモン」と同様、コロスは基本的には外部の批判的視点を取っている。しかし自己自身への回顧的な評価であるために、完全には「物語世界外の語り手」による視点にはなっていない。むしろそれは、回顧する時間が物語世界の延長上に存在しないであろうことを含め、序劇でのベルリンの姉妹による回顧的な語りと似ている。大きな違いは、姉妹の回顧的な語りは回顧された時点での決断についての反省を含んでいるが、物語世界の中のコロスにはそのような選択が存在しないことだ。姉妹は一貫して「兄さん」の側に、コロスはクレオンの側に立つ。

非アリストテレス的演劇の追求にあたってブレヒトは叙事文芸の「語り手」を演劇の中に持ち込んだ。その目的はブレヒト的な「異化効果」であるが、「演劇」というジャンルは、例えば焦点化に関して、叙事文芸ほどの自由度を持たない。他方で、序劇に見られるような「語り手」の短い区切りでの変更、語り手と物語世界との曖昧な関係など、叙事文芸の可能性を「演劇」の枠組みの中で追求することでこの作品は独特の効果を与えている。コロスという「語り手」を持ち、クライマックスの重要な場面を伝令による「報告」という要約的後説法に頼っていたギリシア悲劇を取り上げたことによって、叙事演劇の新しい可能性が開かれたのではないか。

4 予言者・神・国王

ブレヒトは本作で、ヨーロッパの演劇理論の中で理想化されてきたギリシア悲劇が、「運命」「神々」などの、人間のレベルを超えた存在の影響力を認めてきたことに異議を申し立てる。そして「徹底的な合理化 (Durchrationalisierung)」を通じてそれを排除しようとする⁵²。例えば、衛兵に曳かれて登場したアンティゴネを前に「運命きだめの力 (des Geschcks……die Kraft) は恐ろしい」(B831)と語るコロスに、彼女は「罪なき私を破滅させる／男のことを話しなさい。運命 (ein Geschick) は／あいつと繋げなさい」(B835-837)と応答する。彼女の破滅は、もはや逃れられないという意味では ein Geschick であるにせよ、das Geschick ではないのである。

この点で興味深いのは予言者テイレシアスの存在である。ソフォクレス版では、テイレシアスは、「徴しるしなき供犠くぎの空しきお告げ」(S1013)から、クレオンに対しポリュネイケスの埋葬を認めるようにと助言に来たのだが、「穢れになるのではと怯えてあの男の埋葬を許すつもりはない」(S1042-1043)というクレオンの言葉を受け、自分の「胸の奥に留まっている」(S1060)もう一つ

51 T「だがあの女、すべてを悟りはしたが、ただただ敵を助けたばかり。」I「だがすべてを明察した彼女も／結局は敵を助けることになっただけだった。」これらの邦訳は、「すべてを知る」ことと「敵を助ける」ことを逆説的に捉えているが、むしろ、「すべてを見通した」からこそ、「敵を助ける」しかなかったのである。Jens (1978: 417) は「ソフォクレス」と「ブレヒト」の対話というフィクションの形で『アンティゴネ』について論じているが、そこで「ブレヒト」に「敵を助けることで……アンティゴネは道徳的な負担金 (Kontribution) を支払っている」と語らせる。それは、彼女が「スターリングラードの前まで」黙っていたことへの負担金なのである。

52 AM17. ブレヒト『作業日誌』1948年1月18日。徹底的合理化の概念については Barner (1987), Flashar (1988) などを参照。

の予言、ハイモンの死の予言を明らかにし、それがクレオンに決断を翻させることになったが、翻意は手遅れだったのである⁵³。

他方、プレヒトでは、ヘルダーリン訳を簡略化して用いた第一の予言に関しても、テイレシアスが凶兆とみなしたのはソフォクレスのように供儀の失敗でも、ヘルダーリンのように鳥たちの狂乱でもなく、勝利が確認されてもいないのにテバイの民衆がクレオンの命令で行っているバッコス舞踊の「狂宴」であった。そしてこれはプレヒト自身が持ち込んだ設定である。また、ソフォクレス版でテイレシアスが「胸の奥に」留めていたもう一つの予言は用いない。むしろ「勝利の列柱の鉄の覆いがかなり薄い」こと、「軍用に毛皮を縫っている」こと、「魚を干している」(B981-984) ことなどから、戦争が長期化する見通しであり、クレオンの勝利宣言が偽りであることを推論し、ポリュネイケスとアンティゴネを破滅させた「非道な」クレオンが「非道に絡みつかれて」(B999) いると非難する。こうした現状分析に基づくその第二の「予言」は次のようなものだ。「放漫財政は大儲けを求めて喚くが、見出されるものは「なし」である。戦争は箍が外れ、その脚を折る。略奪は略奪を生み、冷酷は冷酷を求める。「もっと」は「もっと」を求め、最後に得られるものは「なし」である」(B1010-1013) と。テイレシアスの二つの「予言」には超自然的な要素は存在しない。テイレシアスは、「先を見通す」のではなく「現在と以前とを見てとることで我が業のうちに留まり、予言者でおろう」と述べるのである。このテイレシアスの自己規定には、ソフォクレスのアンティゴネが「徹底的に合理化されていない」というプレヒトの認識と、それへの修正の意図が見いだされる。

神もプレヒト版では曖昧になっている。すでにヘルダーリンが、「神」という訳語がギリシアの神々を表すには不適切であると考え多くの箇所です「精霊 (Geist)」を用いるが、プレヒトは「神」も「精霊」もあまり用いない⁵⁴。名詞形の「神 (Gott)」がディオニュソス以外に用いられるのは、クレオンが最初に登場するときにコロスに対し、「第一に、敵を踏みにじる戦車の車輪の数を戦さの神に数えさせてはせず、子息らの血を戦場で惜しみもしていないことを儂は承知しておく。」(B146-149) と述べる箇所など、極めて僅かである。そしてこれは、収支を度外視した総力戦を行ったことの比喩に過ぎない⁵⁴。例外がディオニュソスで、ギリシア悲劇でテバイのセメレとゼウスの子とされるディオニュソスは、プレヒトにとっては「地方の民衆神 (der locale Volkshelige)⁵⁵」なのである。

このようにオリンポスの神を排除することが直ちに「近代化」になるわけではない。むしろ彼は、テバイと古代ギリシアに、秩序付けられた神々の世界への信仰以前の原始的で暴力的で未開な

53 テイレシアスは舞台上に登場したときからこの予言を用意していたのか、そうだとすると予言は仮言的なのか定言的なのかなど、この第二の予言はソフォクレスでも解釈が難しい。

54 「神」はディオニュソスに関しては B819 (den Gott)、1196、1209 (Freudengott) が、アレスについては B147 (dem Kriegsgott)、ハデスに関しては B754 (Todesgott) で、特定の神と結びつかない形では B110 (alle Göttertempel) B310 (Götterversuchung)、B950 (Götter) で用いられる。但し、göttlich などの形容詞とその名詞化は比較的用例が残る。Geist はディオニュソスに関しては B729 (Geist der Lüste im Fleisch)、B1190 (Geist der Freude)、アレスに関しては B10、B826、830 (der Schlachtgeist)、ハデスに関しては B806 (ein Geist) で、特定の神と結びつかない形では B228 (Die Geister) で用いられている。二つの言葉の使い分けはヘルダーリン訳を引き継いでいる場合が多い。また B274、B369 には die Himmlischen が用いられているが、これは θεῶν (S337) (神々) に対するヘルダーリンの訳語 (H258) を用いている。ソフォクレス版では神 (θεός, θεά) の用例だけで40に及ぶ。

55 AM12. 『作業日誌』1947年12月16日。

信仰に基づく社会を見出そうとした。だからこそ、「神」「精霊」と呼ばれるディオニュソスは、「酔っ払ったバッコス」として表象されるし、また、舞台空間を取り巻く列柱には「馬の骸骨」が掲げられるのである。

更に、ブレヒト版で興味深いのは「王」を表す単語がすべて取り除かれていることである。ソフォクレス版では、「王」を表すギリシア単語としては、*βασιλεύς* およびその派生語が5箇所、*ἄναξ* が12箇所、*κοριονίδης* が1箇所用いられている。ブレヒトがギリシア悲劇のテキストに依拠している箇所でブレヒトが採用したヘルダーリン版がそれをどう訳しているのか、またブレヒト版ではどのようにしているのかを纏めたのが次の表である⁵⁶。

(これらの言葉がクレオンを指さない場合も含む。また、ブレヒト版に対応する箇所や言葉がない場合には×としている。)

ソフォクレス版行番号	単語	ヘルダーリン	ブレヒト
155 (コロス)	<i>βασιλεύς</i>	Der König	Kreon, Menökeus' Sohn (B115)
223 (見張り)	<i>ἄναξ</i>	Mein König	Herr! / Mein Führer (B185-186)
278 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	Mein König	O Kreon, Sohn Menökeus' (B225)
382 (コロス)	<i>βασιλείοις</i>	königlichen	staatlichen (B317)
388 (見張り)	<i>ἄναξ</i>	Mein König	×
398 (見張り)	<i>ἄναξ</i>	o König	×
563 (イスメネ)	<i>ῥῶναξ</i>	mein König	×
724 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	Mein König	×
766 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	mein König	Herr (B708)
940 (アンティゴネ)	<i>κοριονίδαι</i>	Herrn (コロスに)	×
941 (アンティゴネ)	<i>βασιλειδῶν</i>	Die Königin	×
956 (コロス)	<i>βασιλεύς</i>	Dryuas Sohn./ Der Edonen König	des Dryas Sohn (B815)
988 (テイレシアス)	<i>ἄνακτες</i>	Ihr Fürsten Thebes! (コロスに)	×
1091 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	mein König	Herr (B1017)
1103 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	mein König	×
1150 (コロス)	<i>ῥῶναξ</i>	Herrn (ディオニュソスに)	×
1172 (コロス)	<i>βασιλέων</i>	vom Fürsten	×
1257 (コロス)	<i>ἄναξ</i>	der König……selbst	der Vereitelte (B1275)

原文が *βασιλεύς* や *ἄναξ* 以外の箇所、ソフォクレスから逸脱する部分でも、クレオンに対する典型的な呼びかけは Herr であって、ときに父称付きで名前が呼びかけられることもある。注目すべきは、呼びかけ以外の箇所でも「王」という名詞が徹底的に避けられていること⁵⁷、見張りが二度、ドイツを想起せずにはいられない「総統 (Führer)」を用いていることである。クレオンとヒトラの重ね合わせは、ハイモンが率いる部隊が「突撃隊 Stürme」と呼ばれていること、伝令が告げるアルゴスでの戦闘の情景がスターリングラードの攻防を意識させることとともに、初演当時の観客にはかなりあからさまなものに感じられただろう。

クレオンが「王」とは呼ばれていないことは、ブレヒト版では、『アンティゴネ』の舞台であるテバイは、血統によって権力が継承される王権国家とはみなされていなかったことを意味する。ソ

56 ギリシア語の用例の抽出は Thesaurus Linguae Graecae (TLG : <http://stephanus.tlg.uci.edu>) による。

57 ソフォクレス版においては、アンティゴネは一貫してクレオンへの「王」の呼称を避けている。

フォクレスはクレオンの権力継承について、エテオクレスとポリュネイクスの死後、「亡くなった二人の最も近い親族であることによって全権と王座を得ている」(S173-174)とクレオンに語らせているが、ブレヒト版ではそれは排除されている。だから、ポリュネイクスもエテオクレスも、オイディプスの一族であるとはいえ、ブレヒト版では王でも王位継承権を持つものでもなくクレオンの部下に過ぎず、アンティゴネもクレオンの末子ハイモンの許嫁であるに過ぎない。重要なのはクレオンの独裁であって王制ではなかった。クレオンとヒトラーを重ね合わせているブレヒトにとって、クレオンを「王」と呼ぶのは不適切だったのである。

このことは、ソフォクレスが「僭主」に当たる *τύραννος* およびその派生語を用いている場合からも検証可能である。四度の用例は以下の通りである。

ソフォクレス版行番号	単語	ヘルダーリン	ブレヒト
60 (イスメネ)	<i>τύραννον</i>	Herrn	Herrschenden
506 (アンティゴネ)	<i>τυραννίς</i>	Königstum	×
1056 (テイレシアス)	<i>τύραννον</i>	Tyrannenart	Tyrannen
1169 (報告)	<i>τύραννον</i>	tyrannischer	×

ソフォクレスでブレヒトのテーマを先取りしているのが、アンティゴネがコロスについて「この人たちもみな、恐怖が口をつぐませていなければ、それ（埋葬）は良いことだと言うでしょう」(S504-505)と語った直後に置かれている「暴君は、幸せなことに、何を言おうが行おうが好き放題が許されるのです」(S506)というクレオンへの皮肉であるが、「独裁」を表す原文の *τυραννίς* はヘルダーリンでは Königstum (王権) と訳されていた。そして独裁批判を王権批判に解消してしまうヘルダーリンのテキストをブレヒトは採用していない。また、プロロゴスでイスメネが、女である自分たちは「法を破って君主の方々 (*τύραννον*) のお定めや権力に」逆らえないと述べている箇所をヘルダーリンは Herrn と訳しており、ブレヒトでは「暴力が私に向けられているのだから私は支配者 (dem Herrschenden) に従う」(B68) がそれに対応する。

他方「予言者の輩はどいつも金銭に目がなからな。」というクレオンの嘲りに対する「独裁者の輩こそ汚い金儲けを好むもの」(S1055-1056) テイレシアスの反応は、同じ嘲りへの「その金を払うのは独裁者たち (Tyrannen) だと聞く」(B965) として受け継がれている。これ以外には、ブレヒト版では「独裁者 (Tyrann)」は、プロロゴスに対応する箇所アンティゴネがエテオクレスについて「独裁者の遠征の中で」(B80) 斃れたと述べる箇所にも用いられており、冒頭から『アンティゴネ』の枠組みを作り上げていたのである。

5 結

ブレヒト版の『アンティゴネ』は、ドイツではほとんど上演されてこなかった。他方、日本では、数ある『アンティゴネ』の中でも上演回数が多いのではないだろうか⁵⁸。ドイツでの上演が少

58 ドイツでの上演について、たとえばフリックは、「ブレヒトの『アンティゴネモデル』がわずか数十年でとても博物館的なものに感じられるようになり、劇場の上演プランにはほとんど現れず、他方、ソフォクレスの『アンティゴネ』はいつも新しい舞台化 (Aktualisierung) と変容のうちにその永続的な魅力を示している」(Frick 1998: 501) と述べる。他方日本での人気は上演と結びついた翻訳が繰り返さなされていることから窺われる。すでにヘルダーリン版が、1919年にチューリヒで、1923年にダルム

ない大きな理由は、18世紀末のヘルダーリン訳が曖昧かつ難解であり、読書には相応しいかもしれないが上演に適しているとは思われないところにあるだろう⁵⁹。他方、翻訳ではそうした問題はなくなる。日本語でも、注で言及した谷川道子訳、岩淵達治訳を始め翻訳はかなりある。いずれも本作を、ブレヒトのテキストとしての上演に相応しい日本語で訳したものである。

それらに加えて新しい翻訳を試みたのは、従来の訳が、ブレヒト作品の大きな特徴である間テキスト性にあまり注意を払っていないように見えたからである。ブレヒトはヘルダーリン訳のソフォクレスのテキストを用い、それを様々に改変している。とりわけソフォクレスの物語をかなり忠実に追った前半は、ヘルダーリンそのままの、あるいは少し変更を加えただけのテキストが多用されている。そして、ヘルダーリン訳は、彼とその時代からのソフォクレスへの一つの応答である。そしてブレヒトは、文脈を変えてヘルダーリン訳をそのまま用い、あるいは部分的に書き換えることで間テキスト性を強調する。

例えば、「恐ろしきもの (*τὰ δεινὰ*) は数多あれど、^ひ人間より恐ろしきものはない。」と始まる第一スタシモンの所謂「人間讃歌」の *δεινός* は、「恐ろしい」という否定的な意味と、「強力な、素晴らしく巧みな」という肯定的な意味を持つ両義的な言葉だが、ソフォクレスでは主に肯定的な意味が支配し、否定的な意味は最終連で暗示されるにとどまる。ヘルダーリンは *ungeheuer* と訳すことで、言葉の両義性とその力を原文よりも強調する。そしてブレヒトは最終連を書き換え、人間が人間に対して「凄まじい」悪行を行う例を加えることで、この言葉の両義性を浮かべ上がらせ、その否定的な意味を強調している。

ブレヒトの『アンティゴネ』は、アンティゴネとクレオンの両方にそれぞれ限定的な正義を認めるヘーゲル的な理解の対極にある。イデオロギー的にはブレヒト版はクレオンとコロスに対し全面的に否定的であり、アンティゴネに対しては肯定的だ。本作は、テキストレベルでの間テキスト性が、イデオロギーレベルでのモノローグ性を支えるという興味深い作品になっている。

訳者はドイツ文学の研究者ではなく、ヘルダーリンのドイツ語にはかなり苦労したが、ソフォクレス版の翻訳の経験があるので、三つのヴァージョンの違いについては意識した。その限りでは新しい翻訳を行う意義があったかと思う。

なお、本訳では固有名詞は、特にドイツ語の発音を考慮した表記にはせず、ギリシャ語をカナ書きするときの標準的な方法を用いた。つまり、*x* は力行で、*θ* は夕行で転記し、母音の長短は区別しない。ただし、*φ* はファ行で転記し、*μ* の前の *σ* は濁音化しなかった。

文献

文献の表記は前号に挙げたものに従う。本号で追加した文献は以下の通り。ただし、ソフォクレス、ヘルダーリン、ブレヒトの原典とブレヒトの英訳、邦訳は注でも略号で挙げているので再掲する。

Barner, Wilfried (1987), »Durchrationalisierung« des Mythos?: Zu Bertolt Brechts ›Antigonemodell 1948‹, in Paul Michael Lützler (hrsg.) *Zeitsgenossenschaft: zur deutschsprachigen Literatur im 20.*

シュタットで上演されるまではほぼ忘れ去られていた翻訳であった。その後ナチスの庇護の元で、1939年から44年までに150回の上演がなされているとゼッティは伝えている。Zetti (2017: 8).

59 ブレヒト自身が関わったものを別にすると、欧米での最も重要な上演は1960年代から1970年代にかけてのリヴィング・シアターによるものである。これはリヴィング・シアターを共同主宰していたジュディス・マリーナ自身の英訳を用いている。本作品の英訳には、英語版のヘルダーリン全集で『アンティゴネ』を翻訳したデヴィッド・コンスタンティンのものがあり、正確さではマリーナ訳を上回るが、そのままの形での上演を前提としているようには見えない。

Jahrhundert, Festschrift für Egon Schwarz zum 65. Geburtstag, Athenäum, Frankfurt a. M., 191–210.

Frick, Werner (1998) ‘>Moira< und Marxismus: Episierung und >Durchrationalisierung< in Bertolt Brechts »Antigonemodell 1948«’. In: Werner Frick, *Die mythische Methode. Komparatistische Studien zur Transformation der griechischen Tragödie im Drama der klassischen Moderne*. de Gruyter, Tübingen, 481–551.

Jens, Walter (1978), ‘Sophokles und Brecht: Dialog’ in Walter Jens, *Zur Antike*, Kindler Verlag, München, 414–433.

Savage, Robert (2008), *Hölderlin after the Catastrophe: Heidegger-Adorno-Brecht*. Camden House, New York.

Zetti, Rossana (2017), ‘Antigone’s (mis)appropriations in Twentieth-Century Europe: Memory, Politics and Resistance’ *Calíope: Presença Clássica* 34–2, 4–23.

フリードリヒ・ヘルダーリン (1969) 『ヘルダーリン全集4、論文／書簡』手塚富雄ほか編、(河出書房新社)

『アンティゴネ』のテキストと翻訳

ソフォクレス

Dain, A and P. Mazon (1955), ‘Antigone’, in *Sophocle*, vol.1, (Paris: Les Belles Lettres, 72–122. (本稿ではSとして行番号を示す)。

北野雅弘訳 (2020) ソフォクレス 『アンティゴネ』、西洋比較演劇研究会編 『ベスト・プレイズ2』所収。

ヘルダーリン

Hölderlin, Friedrich (1946–1952) ‘Sophokles Antigonaë’, in *Sämtliche Werke, 5. Bd. Übersetzungen, herausgegeben von Friedrich Beissner*, kleine Stuttgarter Ausgabe. (W. Kohlhammer, Stuttgart) (注ではこの書籍への参照はHとしてページ番号を示す)。

ブレヒト

Brecht, Bertolt (1988). ‘Antigonemodell 1948,’ in Werner Hecht (hrsg.), (1988), *Brechts Antigone des Sophokles* (Suhrkamp Verlag: Frankfurt a. M.) 47–165. 本文中に () で括っている行番号はこの書籍に基づく。ただし、10行毎ではなく、話のまとまりに応じて記述する。注ではBと省略し行番号を示す。また、『アンティゴネ』テキスト以外の文章はAMとしてページ数を示す。

Constatine, David (2003) ‘The Antigone of Sophocles’, translated by David Constatine in Bertolt Brecht *Collected Plays: Eight*, (Bloomsbury, London). (注ではCとした)。

Malina Judith (1984). *Sophocles’ Antigone*, Adapted by Bertolt Brecht Based on the German Translation by Friedrich Hölderlin and Translated into English by Judith Malina. (Applause, New York). (注ではMaとした)。

岩淵達治訳 (2001) 「ソポクレスのアンティゴネ：ヘルダーリンの翻訳を底本にした舞台用改作」、岩淵達治訳 『ブレヒト戯曲全集別巻』所収、未来社。(注ではIとした)。

谷川道子訳 (2015) 『アンティゴネ：ソフォクレス原作・ヘルダーリン訳による舞台用改作』、光文社。(注ではTとした)。